

〔「山水—理想郷への旅—」展によせて〕

『太平山水図』に見られる山水構図の由来について

明末清初は、中国の版画芸術が洗練を極め、有名画家が下絵制作に参加した個性的な版画が多く作られた時代です。蕭雲從（1596～1669）原画の『太平山水図』は、この時期を代表する山水版画集であり、大和文華館にも1冊が収蔵されています。『太平山水図』は、済南（山東省）出身で、順治3年（1646）に太平府（安徽省）の長官となった張万選が、2年後の転勤にあたって制作した『太平三書』全12巻の一部です。『太平三書』は『図画』1巻・『勝概』7巻・『風雅』4巻から成ります。『勝概』・『風雅』はいずれも太平府の名勝に関わる詩文を収録し、『勝概』は府内の当塗・蕪湖・繁昌3県それぞれの場所ごとにそれを題にした詩文を掲載、『風雅』は太平府に縁のある人物ごとに、それぞれの詩文を掲載しています。現在『太平山水図』として知られるのは、『図画』の部分で、当塗から15景、蕪湖から14景、繁昌から13景を選んで図にし、始めに張万選の小序と目録・全図・分注を付けています。張万選は、詩文の不足を補うために、また遠く離れることになる各名勝を想うよすがとなるように、地元の画家・蕭雲從に山水版画の下絵制作を依頼したといえます。

蕭雲從は蕪湖の人です。明代末期に何度も官吏登用試験の科挙に挑戦しましたが、結局合格しないうちに明朝は滅亡してしまいました。ただ、彼は明末の高名な文学・政治結社である復社に名を連ねていたと記録され、活動の実態は明らかでないものの、この経歴が蕭雲從の文人としての名声形成に大きく寄与したと推測されます。また、崇禎9年（1636）の作品が現存しており（北京故宫博物院）、この時期には画家として活動していたことがわかります。『太平山水図』の各図には、蕭雲從によって題とその場所を詠んだ古詩が書き込まれ、款記が続きます。詩は、『勝概』もしくは『風雅』から選ばれたもの、款記は、各図が唐代から明代にいたる有名画家をそれぞれ学んでいることを表明するものであり、文人画家としての蕭雲從の教養が発揮されています。墨刷単色の木版である『太平山水図』では、倣古のヴァリエーションは、主に皴法で表されます。北宋時代の郭熙を学んだという細長い皴（「青山図」部分、図1）、南宋時代の夏珪に倣ったという点皴（「天門山図」部分、図2）、元時代の趙孟頫風という明暗の強調された皴（「横望山図」部分、図3）などの変化に富んだ表現、またそ

れを版木に写した刻工の卓越した技術は、この作品の大きな見所の一つです。

ここでは、皴法の他に、多彩な構図にも注目したいと思います。『太平山水図』は、蕭雲從の熟知する郷里の実在の名勝を題材にした絵画であり、その構図には当然実際の景観が反映されていると考えられます。ただ、実景を鑑賞にたえる平面上の造形に仕上げるためには、先行する山水図像の研究を欠かすことはできなかったでしょう。蕭雲從は、脳裏にストックされた様々な山水図像を実景とつき合わせながら、多種多様な42の構図を練り上げのではないのでしょうか。例えば、『太平山水図』中の「采石図」（図4）は、画面半分を近景の山石が覆い、その背後に空白としての水面が見え、上方に遠山が置かれる、疎密の対比の強烈な特徴ある構図をとりますが、類似の構図は『太平山水図』に先行する名山版画集である『天下名山勝概記図』（1633年刊）中の挿図の一つ、「華岳図」（図5）に見ることができます。両者は描く対象こそ異なりますが、基本的に同じ構図で眼前に迫る迫力ある岩壁を表現しています。

同様に興味深いのは、倣李公麟という「荆山図」（『太平山水図』、図6）です。画面ほぼ垂直に水路が示され、一艘の小舟が下ってきます。両脇には峻峻な岩壁がそびえる印象的な景観です。この構図は、

王概原画の複製名画集である『芥子園画伝』初集（1679年）にも「李公麟峽江図」（図7）として転用されたことが指摘されています。このような構図の由来として、注目したいのが、明代中期の著名な旅行山水図冊・『白岳紀遊図冊』（1554年、藤井齊成会有鄰館）です。これは蘇州の文人画家であった陸治が、蘇州から白岳（齊雲山、安徽省）までの各景観を描いた作品で、目的地である白岳を図した最後の2図以外は、画面の水平あるいは垂直方向に水路が表され、旅の道りが示されています。各図の連続性が重視されており、鑑賞者は頁をめくりながら、旅行を追体験できるのです。このうち、岩壁にはさまれた細い溪流とその上と行く小舟を垂直方向に描いた「白馬夫人廟図」（図8）は、『太平山水図』「荆山図」と同種の構図といえます。陸治の画冊は明代中後期の旅行山水図冊のブームの中で、模本が作られ、その図様はよく知られていたと推測されます。蕭雲從は、このような明代中後期の旅行山水図冊の成果も『太平山水図』にとりこんでいったのではないのでしょうか。（植松瑞希）

※図5は『中国版画叢刊二編第八輯』（上海古籍出版社、1994年）、図7は『芥子園画伝初集』（芸艸堂版）図8は『特別展 蘇州の見る夢』（大和文化館、2015年）より複写いたしました。

図1

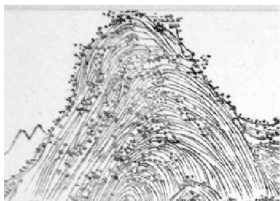


図2

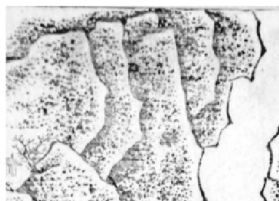


図4



図5



図3



図6



図7

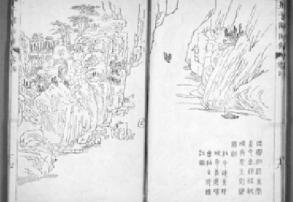


図8



季刊 美のたより No.193

平成28年 1月 6日

発行 大和文華館